

酔筆 (15) プロの画家になれないわけ

新井 俊郎

15年前、私は網干さんからp-6のスケッチ・ブックで毎年4,320枚描けと言われた(詳しくは前々号を見られよ)。あれから15年間だから、何と64,800枚になる。これだけ描いていたらとっくにプロになっていただろう。網干さんは確か30歳代半ばにして日銀を辞めた。所謂キャリアの椅子を捨てたのである。このとき、上司から「辞めて何うするつもりか」と問われ「絵描になるんです」と思わず答えたそうである。

私の推測では、日銀を辞めるや否や猛烈に描いたんだと思う。毎年、5,000枚はおろか6,000枚、7,000枚をまるで気違いのように描いたに違いない。そして、見事にプロになった。おそらく10年を必要としなかったのではないか。今頃になって、こんな当前の事が分ってきた。今からだって、毎年4,000枚は無理だとしても2,000枚は描ける筈だ。毎日、5~6枚描けばいいんだから。それが出来ない。

去る7月の末、久しぶりに午後から晴れた。気になっていた向日葵を描きに出かけた。2号のスケッチ・ブックと水性ボール・ペンと水筆とポケット水彩絵具とアルミの椅子を持って。家から4、5分のところに畑があつて、道路際に向日葵を植えているのである。

2枚描いた。画面いっぱい描いた。葉がはみ出した。彩色した。良い出来だった。陽射しが強く、昼飯代りに飲んだビールの酔いが廻ってきたので2枚で止めた。帰路、ムクゲが咲いていた。高かったので立って描いた。帰宅して色をつけた。これも気に入った。

偶然が多いが、気に入った作品ができた時は、本当に楽しくなる。爽快というか、快感というか、矢でも鉄砲でも持って来い、と言う気持ちになる。

短歌の場合も、そうである。

激しかりしA君にして今日あふに地位得てすこぶる曖昧な顔

⑥ これは、先月、昔の会社の研究発表会の懇談会に招かれたときの一首である。この一首も散文にすれば、30枚や50枚(400字)にはなるだろう。60年安保で活動しすぎ、就職先のなかったAを引取った。たえず、食って掛かって来たが、優れた頭脳を持っていたし、実験室に折畳式寝台まで持ち込んで仕事をした。あれから、30年になる。激しかった顔付が、地位を得てばやけていた。感無量の思いを33音にまとめた。読み返して見て、これが人間なんだな、と思う。反面、口惜しい気にもなる。いずれにしても、苦勞して出来た作品だけに私にとっては、やった!、と言う爽快感があり、快感がある。

『酔筆』のような雑文でも、形を変えた脳味噌の搾り出しである。人真似でないから何処かに一つ二つキラリと光るものがある筈である。たとえ、酒を飲みながら書いていても頭の隅は醒めている。そして書き終ったとき、必ず爽快になり、快感を覚えるのである。

これが忘れられない。画のときとはまた異なった清々しさが身体の中を通り抜けるからである。これでは、何時になってもプロの画家にはなれない。(2003-10-10)

(なお、網干教室を退いた訳は何れ書きたいと思っている)

「『酔筆=馬』をたずねて」というようなテーマで文を草しようと思つた。はやり、又平成代りに、我が、文藝界に(馬)と云ふ『馬』とは9月2日と

9月23日に「酔筆」(馬)に付いて書いた。3つに1つは「酔筆」に付いて書いた。